

令和6年度 各都市教頭会 研究報告 1

岐阜市小教頭会

未来を切り拓く力をはぐくむ 魅力ある学校づくり

岐阜市小学校教頭会は、学校数48校、教頭数52名、年間11回、定例で5つのブロック別研修会と4つの専門部会（研究・組織・広報・厚生）、小中合同ブロック別研修会（年間2回）を実施し、教頭としての資質向上に努めている。

取組としては、各校の活動状況や成果・課題を口頭や紙面で報告・交流している。年度末には、各ブロックでテーマとしている内容をブロックの研究部員がプレゼンテーションにまとめ全体の場で報告している。

また、ICTの利活用（ペーパーレス化、授業支援ソフト、連絡支援システム等）、教職員への研修（特別支援教育に関わる内容、若手教職員の育成等）、働き方改革（校務支援システム等）について協議し、教頭同士で直接、情報交流ができており、その情報を基に実践を進めている。

（文責 芥見東小学校 石橋 信弘）

羽島市教頭会

未来を生きる力を育む 魅力ある学校づくり

羽島市教頭会では、各回でテーマを設け、自校の実践の成果と課題について交流している。今年度は、「防災・防犯について」「いじめ・不登校対応について」「職員指導について」等のテーマについて交流を行った。学校の規模、地域性、児童・生徒の実態や保護者対応等、様々な違いがあることで、多様な指導や対応の方法を学び合い、自校に持ち帰り、実践に生かすことができた。小・中合同で行うことで、小中の情報共有や連携を深めることにもつながった。

また、外部講師による研修「学校運営と情報リテラシー」を受講し、NIE教育の必要性を学び、新聞を通して児童生徒に身に付けさせたい力が明確になった。

今後も研修を重ね、教頭としての見識や人間性を高め、魅力ある学校づくりに貢献していきたい。

（文責 小熊小学校 近藤 祐子）

岐阜市中教頭会

希望あふれる未来を自ら拓く力を育む
魅力ある学校づくり

市内25校35名の教頭が（1）子供たちの発達に関する取組及び成果と課題（2）教頭の職務に関する実践及び成果と課題という2つの研修内容に対して、4つのグループの2部制で実践交流を実施し、教頭としての資質向上に努めている。勤務校での取組や目の前にある諸課題について発表者からの報告後、それぞれの立場や経験をもとに意見交流を行った。その中から取組のヒントやできそうな活動をもち帰り、教育活動に活かしている。

また、実践交流以外にも、岐阜市教育長講話やスクールロイヤー研修、いじめ対策に関する研修、岐阜清流特別支援学校参観などの研修を行い、各勤務校における教育活動の向上に繋げることができた。

今後も教頭間のつながりを大切にした研修を充実させることで、学んだことを教職員指導や校内研修の充実の一助となる研修を実践でき、今後も「魅力ある学校づくり」を押し進めていきたい。

（文責 東長良中学校 市川 実）

各務原市教頭会

児童生徒にとって魅力のある学校づくりを推進する教頭の役割～教職員の専門性を高める人材育成と組織運営・外部連携を通して～

本会では、研究内容「教職員の専門性を高めるための研修と指導における教頭の関わり」「チーム学校による学校運営を機能させる教頭の関わり」について、各校の実践交流の他に、5回にわたる講話研修、特別支援学校への見学を行った。

講話研修は、外部から2回講師を招き（①スクールロイヤーによる保護者対応②大学准教授による行動分析と児童理解）、より専門的な知識を身に付ける機会とした。また、昨年度に引き続き、「考える教頭会」として、講話内にグループ交流を位置付けた。学んだことを、普段の生活の中でどう生かしていくかを話し合うなど、より主体的に研修に向かうことができた。さらに、今年度は、実際に特別支援学校を訪れ、義務教育を終えた子供たちの姿を見据えて指導していく大切さを学ぶことができた。今後も研修を充実させ、魅力ある学校づくりを推進していきたい。（文責 中央小学校 江藤 美香）

各郡市教頭会 研究報告 2

山県市教頭会

組織を生かした学校運営
～「豊かな人間性と創造性を育み、未来を拓く学校教育」の具現のために～

本市は、山県の子どもたちを豊かに育む「山県学園構想」のもと、小学校間、小中の校種間で連携した合同授業や行事などの取組を重ねている。こうした連携の中心を教頭が担い、各校での実践をコーディネートしてきた。

具体的には、毎月の教頭会において、小中の校種別交流、中学校校区分交流、学園構想での連携校別交流の時間を設け、この中で、自校の取組を振り返るとともに、校内及び学校間の協働的な体制づくりへの具体策を話し合ってきた。成果や今後の課題も挙げ、次年度につなぐようにしている。

研修としては、山県市こどもサポートセンターの所長講話を行った。不登校傾向にある児童生徒への対応や教育相談においても、教頭として適切な指導・支援ができるように、研修や対応事例の交流などを通して、さらに研鑽を積んでいきたい。

(文責 富岡小学校 山田 三穂)

本巣市教頭会

未来を切り拓く力を育む 魅力ある学校づくり
キーワード<自立・協働・創造>

本巣市教頭会では、全国統一研究主題の6課題の中から自校の実態を踏まえて計画・実践し、年5回の研修会で交流・討議をしている。

自校の課題に応じて実践を持ち寄り、意見交流を行い、各校の課題や状況を知るとともに、それに対する解決方法などについて学び合うことができた。ICTを活用した業務の改善や教職員の協働体制づくり、防災教育等を含めた危機管理、PTAの組織運営や学校への協力依頼、地域連携の推進等については、実態は違えど各校ともに課題となっており、話題となった。こうした実践について質問をし合ったり、改善策を検討したりするなど、次からの実践に向かうための有意義な時間となった。

今後も教頭同士の連携を深め、情報共有を行っていくとともに、教頭としてのスキルを高められるように取り組んでいきたい。

(文責 真桑小学校 出町 陽子)

瑞穂市教頭会

教職員が主体的・協働的に力量を高める
働きかけのあり方

本市教頭会では、テーマに基づいた実践を発表し合うことで、お互いに学び合ったことを、自校の取組に生かすことができるようにしている。

研究内容の一つである「教職員の力量の向上を図る取組」では、下記の実践等から学ぶことができた。

- ・タイムリーな時期に短い時間で学ぶミニ研修を位置付けることで負担なく学ぶことができる実践（水泳の安全指導や交通事故防止、教科指導等）
- ・校務分掌（指導委員長や研修主事等）を通して学校経営に参画し資質能力の向上を図る実践
- ・若手にも研修の講師の機会を与え、自分の専門教科や得意としている分野等（ICT活用や学級経営等）について実践を通して具体的に語ることで資質能力の向上を図る実践 等

各校の実態に応じて職員研修等に取り入れ、教職員の力量の向上につなげることができた。

(文責 穂積小学校 堀 貴嗣)

羽島郡教頭会

県研究大会研究協議（提言発表）を振り返って

今年度は、県の教頭会の研究大会を教頭会充実のチャンスととらえ、「地域の教育力の向上を図る教育課程の工夫」と「幼保小中の連携による学校教育の充実」を切り口とし、教育課程に関わるこれまでの実践の成果と課題をまとめ、提言発表することができた。

とりわけ、学校運営協議会や地域の人材・環境を活かした学校行事の実施やそれを核としたカリキュラム・マネジメントの実現、幼保小の接続を考えたスタートカリキュラムや特別支援教育の充実につながる早期支援システムの構築、さらに小中連携と小中協働のこれまでの豊富な実践については、羽島郡小中学校の教育課程の特色や成果として力強く主張することができた。

分科会でいただいたご指導、ご意見、アンケート集計の結果いただいたたくさんのご感想やご意見を財産とし、今後も教頭として「つなぐ」ということ、そして教頭会として「つながっていく」ということを大切にしたい。

提言発表の機会をいただき、ありがとうございました。

(文責 岐南・西小学校 榎井 奈津子)

各郡市教頭会 研究報告3

本巣郡教頭会

「たくましい北方の子」を育む学校教育
～町内連携に果たす教頭の職務と役割～

本巣郡北方町は、昨年度から北方町立北学園と南学園、2校の義務教育学校を開校させた。

昨年度から、北方町が独自に幼保小中15年間を見通し作成したカリキュラムを活用し、実践している。そこで、昨年度に引き続き「たくましい北方の子」の育成をテーマに掲げ、児童生徒の育成に取り組んだ。具体的な取り組みは以下の通りである。

- ・月1回の教頭会において、教育委員会より、教頭として大切にすべき考え方や職務の在り方についての研修の実施。
- ・幼保小中のスムーズな移行に向けた生徒指導交流の実施。
- ・部活動の共同実施。
- ・系統的な教科・特別活動の実施。
- ・若手職員を育てる研修会の実施。

(文責 北方町立北学園 今井田桂太)

海津市教頭会

信頼される学校づくりに資する喫緊の課題
に関すること

今年度より海津町にある全5小学校が統合し、海津市内の小中学校は9校となった。現在、各校が実態に応じて保護者や地域との連携、各種自然災害への対応などを模索しているところである。

そこで、今年度は上記のテーマのもと、以下のことについて実践交流や研修を行った。

①PTA活動の今後の動き（組織・活動の見直し）の交流

②「能動的に防災に対応することのできる人材を育成するには」をテーマにした研修

今年度、PTA組織で会長や副会長等のポストを廃止し、ボランティアで「できる人が できるときに できることを」について考え、活動を進めている学校の実践を交流した。今後も時代の変化に合わせて柔軟な対応ができるよう研修を重ねていきたい。

(文責 石津小学校 塚本達雄)

大垣市教頭会

未来を生きる力を育む 魅力ある学校づくり
キーワード〈自主・協働・創造〉

昨年度に引き続き、第13期のテーマを継承し、令和5～7年度の3カ年で、上記のテーマの具現に向けた取組の実践交流をしている。

令和9年度の県大会を見据えた本年度も、本市が担当する第2課題「子供の発達に関する課題」を取り上げ、学校規模や校種を考慮した3グループに分かれ、年間4回の中で各学校の実践交流を行った。

今年度は、「確かな学力の定着の取組」「児童生徒の健康・体力の増進の取組」「児童生徒の発達を支える教育課題の取組」に関わる実践が多く紹介され、学びを深めることにつながった。

次年度は、「児童生徒の豊かな人間性の育成の取組」「生き抜く力やこれから求められる資質・能力の育成の取組」などにも実践を深められるように、令和9年度の県大会を見据えながら、魅力ある学校づくりの実現へとつなげていきたい。

(文責 赤坂中学校 小川 泰)

養老郡教頭会

ひとりひとりが輝く教育の創造
～地域の教育力とICTの利用を通じた「多様な学び」、
教職員の資質の向上、やりがいのある職場の推進～

昨年度の実践を生かし、持続可能な複数校連携による研修を考え、個別最適な教員の学びを支援する環境づくりに取り組んだ。

・夏季休業中に、教頭会主催で中学校道徳科の研修を実施した。事前（オンデマンド）と当日（参集）で行うことで、時間的制約を軽減しながら、学びが深まる研修会となった。

・小学校の若手教員が中学校へ出向き、自身の専門教科の授業を参観して研修した。

次年度も引き続き、町内教頭の連携により、町内小中学校のつながりを生かし、教員が学び合い育ち合う環境整備を進めていきたい。

(文責 笠郷小学校 伊藤 佐和子)

各郡市教頭会 研究報告4

不破郡教頭会

県研究大会を振り返って

子どもの成長を切れ目なく支えるために、全ての教職員が連携の重要性を理解し、意識して教育に当たる必要がある。その推進の要となって働きかけていくために、研修の充実と、接続期カリキュラムの見直しや改善に取り組んだ。

研修の充実を図ることによって、教頭自身が、連携についての理解を深め、教師が意図的に指導できるようコーディネートをすることができるようになった。また、職員への研修により、職員の意識も高めることができた。カリキュラムの見直しと改善については、教育課程に関する課題シートや連携年間計画を共通様式で作成したことで、郡全体で方向性を共有し見直しをもって指導にあたることができるようになった。今後は、働き方改革とのバランスを考えながら全教職員がさらに理解を深めるとともに、次年度に向けてさらに実効性を高めていきたい。

(文責 垂井町立東小学校 西脇 善頭)

揖斐郡教頭会

未来を切り拓く資質・能力を育成する カリキュラム・マネジメントの在り方 ～魅力ある「学校づくり」「教育活動」「教育課程の編成」～

「育成したい資質・能力は何か」「そのためにどのような活動・工夫を行うのか」「その活動・工夫をどう評価し、改善へとつなげたのか」を明確にし、教頭としての役割を明らかにした。

①地域や保護者に信頼される学校づくり

総合的な学習の活動と他教科・他領域とのつながりを「見える化」した。また、地域人材の効果的な活用を考え、地域と学校をつなぐ役割を果たした。

②教職員によるアンケート目標の数値化

教職員自身にとって「自身の指導の成果を確認するツール」であることを自覚し、より能動的に学級経営や分掌業務に取り組めるよう働きかけた。

③授業改善：小集団での学び合いの充実

子どもの側に立ったその子らしさが表出できる授業づくり。近隣の教頭やミドルリーダーが講師となり、教員の学びを支え、実践力のアップデートに努めた。

(文責 養基小学校 押谷里美)

安八郡教頭会

誰もが自己肯定感をもち、生き生きと生活できる学校をめざして ～組織の活性化と教職員の指導力向上を図るための教頭の役割～

子供たちに自らの伸びを実感させ、自己肯定感をもたせる指導の充実を目指し、教職員の組織的な関わりと指導力向上が重要であると考え、上記主題を設定した。実践交流をしながら研修を進めた。

(1) 組織を活性化するための校内体制の工夫

学級経営等における若手の困り感を受け、メンター制等を取り入るなど、同僚性を発揮したフォロー体制でチーム学校として若手を育成することができた。小学校では教科担任制を積極的に導入して効率的な教科指導に取り組むことができた。

(2) 教職員一人一人の資質や専門性を高める研修の充実及び取組

On-the-Job-Trainingの考えを生かし、校内研究に即して若手、ミドルリーダー、ベテランが授業を見合ったり研修会を行ったりして、それぞれの力量を高めることができた。

また、各校務分掌担当がアンケートの活用等により、主体的に参加できる研修を工夫することができた。

(文責 東安中学校 大久保 佳郎)

関市教頭会

夢のある明るい学校づくりの推進

～幼保小中・地域とのより良い連携を図るための教頭の役割～

未来に向けて夢や希望をもち歩んでいける子どもを育てるために、幼保小中・地域が連携をし、多くの目で子どもを見守り、良さを認めることで自己肯定感を高めることが重要と考え、以下の視点で研究を行った。

① 学校課題(子どもの実態)をもとにつけたい力の明確化

② 地域の教育資源の発掘、人材のリストアップ・整理、生かすための調整方法

③ 地域の教育資源、地域人材を有効活用するための手立て

④ つながりを意識したカリキュラムの見直し

⑤ 業務改善につながる地域ボランティアの活用

⑥ 持続可能なPTA再編や連携の在り方

これらの6つの視点について、学校の実態に応じて、教頭としての役割を整理し、実践することで、より、幼保小中・地域との連携がスムーズになることが明らかになった。

(文責 倉知小学校 白戸 靖二)

各郡市教頭会 研究報告5

美濃市教頭会

県研究大会研究協議（提言発表）を振り返って

教職員の資質向上と職務意識の高揚に関わって提言発表を行った。今年度、本市では「ここから始める未来の学校プロジェクト美濃」と題して、子供たちが「自分で何とかする力」を身に付けられるよう9つの課題に取り組んでいる。教頭会として「自分で何とかする力」の育成を目指して、まず教職員自ら主体的に考え判断し行動する力を身に付けていくこと、すなわち「みんなで学び合い、成長し合う教師集団」として共通理解・共通行動できることが、教職員の資質向上や職務意識の高揚に結び付くと捉え、実践に取り組んだ。提言発表では、授業改善、職員研修、不登校対策について、リーダー及びコーディネーターとしての取組を発表した。

（文責 大矢田小学校 美濃羽 誠）

美濃加茂市教頭会

三重大会研究協議（提言発表）を振り返って

第2次美濃加茂市教育振興基本計画『FROM-0歳プラン2』のもと「学校が楽しい!」といえる学校づくりとして、ICTの活用を重点に、「授業での活用改善」「保護者・地域との連携の工夫」「PTA活動での活動」について各学校での実践を交流し、互いに良さを取り入れるとともに、東海・北陸研究大会（第3分科会）においても実践として発表することができた。

これまでの実践を通して、ICTを活用することで、学校、家庭、地域で児童生徒を育てていきたい思いや考え、活動について情報を簡単に共有できるようになり、信頼関係の向上につながった。また、各校で積み上げてきた財産を互いに共有し活用することができるようになった。職員のスキルアップとともに、児童生徒とかわる時間の増加につながり、学校が楽しいといえる学校づくりに向けてより取り組むことができるようになった。

（文責 西中学校 井上貴弘）

郡上市教頭会

組織・運営に関する教頭の役割
～「つながり」をつくる教頭のマネジメントを通して～

本市においては、教員の大量退職・採用に伴い、若手教員の育成とともに、ミドルリーダーの育成やベテラン教員を生かすマネジメントが急務である。また、8割近くの学校が単学級や少人数学級の小規模校であり、複数の教科や校務分掌を一人で担当しているのが現状である。そこで、教頭の役割は、学校内での協働、そして地域との協働を生み出すマネジメントであると考え、「つなぐ」を合言葉として、学校運営協議会とのつながりを重点に取り組んだ。

○学校運営協議会を「学校内での協働」という視点で推進するための工夫

○学校運営協議会を「地域との協働」という視点で推進するための工夫

「チーム学校」「チーム郡上」をつくる連携・協働を推進するために学校運営協議会を核に、実践ができた。今後は、効果のあった実践を基に教頭だからできるマネジメントを考え、実践していく。

（文責 郡上東中学校 濱 研二）

可児市教頭会

豊かな人間性と創造性を育む
笑顔の学校をめざして

本市では、「未来の笑顔につながる『笑顔の“もと”』をはぐくむ」を念頭におき、自分の「笑顔の“もと”」を自信をもって語ることができる子どもを育てるために、各校特色ある教育活動を行っている。

今年度は、研究テーマを「地域の力を生かし、学校組織を活性化するための教頭の役割」とし、持続可能なコミュニティスクールの運営を目指して実践を行った。

実践交流では、「地域の人材とコーディネーターの連携」や「学校運営協議会と教頭との関わり方」などについて、日頃感じていることを出し合い、困り感を共有したり、解決策を一緒に考えたりした。本市では、コミュニティスクールは始まったばかりである。今後、行政や地域との連携を密にすることにより、各地域の特色を生かした「持続可能」な取り組みを創造していきたい。

（文責 土田小学校 杉本 和昭）

各郡市教頭会 研究報告 6

加茂郡教頭会

県研究大会研究協議(提言発表)を振り返って
第3分科会「教育環境整備に関する課題」
「子どもが安心して過ごせる学校づくり・
環境づくりを目指して」

～魅力ある学校づくりに向けた教育環境の整備～

加茂郡では各校で「魅力ある学校づくりに向けた教育環境の整備」について取り組み、その実践を教頭会研修会で交流している。県大会では、交流した実践から七宗町の取組を元に発表をした。

七宗町では学校統合に向けた新しい学校づくりという視点で、今までのよさは生かしつつも新しい発想を加え、『持続可能な地域連携と活動』を意識して取り組んだ。発表では、以下の三点について述べた。

- (1) P T A活動の精選と新体制づくり
- (2) 学校運営協議会の充実
- (3) 部活動の地域移行

質疑応答や事後アンケートから、どの学校も同じ課題に直面していることがわかった。よりよい活動にするために、これまでのものを踏襲するだけでなく、本当に必要なことを見極め、活動を精選していくことの重要性を再確認した。

(文責 上麻生中学校 牧野 彰江)

多治見市教頭会

全ての職員が幸せに働くことができる学校にするために、教頭として取り組んでいること

多治見市教頭会では、各校で考え、実践していることについて、実践報告の時間を位置付け、交流を重ねてきた。SWOT分析を継続し、職員が幸せに働くことができる学校(学校のウェルビーイング向上)のための学校課題を明確にし、実践したことについて意見交流をするという形で実践研究を深めた。

- 個々の職員の資質向上を図り、マンパワー不足を補う。(O J Tの充実、ミニ研修実施、職員の強み・持ち味を活かした研修)
- 風通しのよい職員室環境をつくる。職員同士が気軽に頼ったり頼られたりできるようにする。(職員の話をよく聴く、教頭の率先垂範、管理職は学校の「お父さん・お母さん」だと思いなさい!)
- 教頭は「つなぐ」動きをする。(人・物・組織等々、教育活動協力者への道筋を切り拓く)

今後も各校のウェルビーイング向上に向け、互いの実践の有効活用につなげていきたい。

(文責 昭和小学校 佐々木 和哉)

可児郡教頭会

未来を切り拓く力を育む 魅力ある学校づくり
～ICT活用を推進する小中連携の在り方～

可児郡教頭会では、昨年度に引き続きICT活用を推進する授業力の向上に取り組んだ。御高町では教頭会が学力向上推進事業を兼ねており、校区の小中が連携して、各学校の成果と課題を交流しながら研究を進めている。主な実践として以下の3点を行った。

- ① 夏休みに教育委員会と連携し校区ごとに、ロイロノートの研修会を実施し、授業力向上のためのスキル向上を図った。
- ② 各学校の全校研究会に、小中の担当職員が参加できる機会を設け交流を深めた。
- ③ 11月の町拡大交流会において、共和中学校がICTの活用方法について実践発表を行った。

今後も、小中連携を図りながらICTを利用した個別最適な学びの方法を深めたり、魅力ある授業作りに結び付けたりしたい。

(文責 向陽中学校 嶋崎 博一)

土岐市教頭会

「生きる力」の育成と今日的課題に応じる教育を推進するための教育を推進するための教頭の役割
～確かな学力を育成するための職員指導と教頭の役割～

今年度、上記テーマ具現に向けて、「確かな学力の育成」に重点を置き、職員指導と教頭の役割について以下の内容で交流しながら研修を進めた。

- ① 「授業の土台 3視点」の確立
- ② 各中学校区における9か年教育(小中接続)
- ③ 効果的な学習環境(ICT)の整備
- ④ 主体的な学びを生み出す「家庭学習の手引き」

小中接続については、研究指定校の実践や小中一貫校の実践や、各校の取組の交流から、中学校区の課題解決に向けた教頭の役割を整理し、具体的な小中の連携の在り方を明らかにすることができた。

教頭同士の情報の共有以外にも、外国人支援、情報モラルの講話や地域の施設見学を通して、研鑽を深めるとともに、多方面とのつながりをつくることができた。

(文責 土岐津小学校 内海 優里)

各郡市教頭会 研究報告 7

瑞浪市教頭会

「働き方改革」の視点をもった「人材育成」

「働き方改革」が求められる中、『時間をどう生み出すか』と『職員のやりがい・主体性をどう高めるのか』の両立の必要性から主題を設定した。

一人一人への働きかけにより、分掌等への意識が向上したり、意欲的な提案につながったりするなど、人材育成を図れたことが一つ目の成果である。

また、働き方改革への指導によって、タイムマネジメントができる職員が増え、結果的に超過勤務時間の減少につながったことが二つ目の成果である。

今後も、人材育成と働き方改革の両立に取り組んでいくとともに、さらに、「働きがいのある職場」の実現に向け、『教頭として何をし、どのように働きかけるのか』を新たなテーマとして掲げ、取り組んでいきたい。(文責 瑞浪中学校 中村 勝)

中津川市教頭会

自校の課題をふまえ、 教頭として力を入れて取り組んでいること

中津川市教頭会は、市内28校、30名で構成され、講話や各種研究会参加報告、実践交流会等で、教頭としての指導力や資質の向上に努めてきた。

実践交流会では、中津川市共通の課題「不登校問題」「体力の向上」を基に、自校の課題をふまえて、教頭として力を入れて取り組んでいることについて、実践発表を通して学び合うことができた。毎月主提案と副提案各1人が実践発表し、それを基に、全員が自己の実践をふまえた意見交流を行うことで、学びを深めた。特に主提案においては、校長会に指導を依頼し、熱心なご指導・ご助言やご講話をいただいた。

また、令和7年度東海・北陸地区教頭会研究大会富山大会での提言発表へ向けて、「教育環境整備に関する課題」における各校の実践を交流し合う中で、中津川市が掲げる「よりよいひとりだち」へ向けた教育環境整備の方途について、議論することができた。(文責 南小学校 松原 元樹)

恵那市教頭会

組織の活性化と教職員の資質向上

昨年度に引き続き、「組織の活性化と教職員の資質向上」をテーマに研究を行った。昨年度の副題「若手教職員の主体性を育む取り組みを通して」をあえて外すことで、枠を広げて実践を積み重ねた。

昨年度から実施しているレポート研修(毎月2人が実践提案、担当校長の指導を受ける)を継続することで、他校での実践から学んだことをすぐに実践に活かす環境ができあがりつつある。また、ICTを利用したテーマの追究を行ってきたが、あえてICTの利用ではないところに目を付けた実践も増え始めた。同僚性を大切にしたい実践は、次年度のテーマにもつながる。これまでの蓄積した成果をもとに、ICTのみに頼ることなく、総合的な改革ができる教頭集団を目指して、来年度からは教育環境整備に重点を置いて研究を始める。その切り口を現在模索しているところである。教育環境が整備されることで、組織が活性化し、児童生徒に多くを還元できる学校を追求していきたい。

(文責 上矢作中学校 田口 大介)

高山市教頭会

個に応じた支援を行うための校種間等連携の在り方

高山市では「挑戦し続けるたくましさの育成」を教育の重点に掲げ、その柱の一つとして、全ての児童生徒に居場所をつくる教育を推進している。多様な子どもたちが安心して学校生活を送ることができるようにするためには、小1プロブレム、中1ギャップなどを解消する連携体制の構築が大切であると考え、高山市では、校種間や様々な外部機関等との連携を推進するとともに、教頭がその連携の要となるよう、以下の事例について交流し、より効果的な方法を探っている。

- (1)幼稚園及び保育園と小学校との連携推進
- (2)小学校と小学校との連携推進
- (3)小学校と中学校との連携推進
- (4)関係諸機関(行政機関、医療機関等)との連携推進

これらの取り組みを通じて、今後は支援の引き継ぎ体制を整えることや、専門家と連携した体制の強化を図り、全ての児童生徒が安心して学び、成長できる環境を構築していく。

(文責 北稜中学校 加納 聡)

各郡市教頭会 研究報告 8

飛騨市教頭会

校内外の専門スタッフや関係諸機関を含めた協働体制構築に向けての関わり

飛騨市では、本年度より作業療法士が各校を月1～2回巡回をし、支援を必要としている児童生徒への直接の支援、学校職員の支援についての助言を行っている。(学校作業療法室) また、本事業のみならず外部の専門家に学校に入ってもらい、児童生徒の支援にあたっていただいている。これらが支援を必要としている児童生徒にとって、真に有益なものとなるようにするためには、専門家と学校職員との連携による協働体制が不可欠である。そこで、本年度は、次の2点を中心に各校の状況や具体的な実践の交流を行った。

- ①協働体制構築における教頭の役割
- ②各職員が専門性を活かし、リーダーシップを発揮して取り組めるための働きかけ

交流を通して学んだ各校の実践のよさを、各校に持ち帰り、自校の体制構築に向けた実践に活かすことで、市内の全ての児童生徒が生き生きと学校生活を送ることができるようにしていきたい。

(文責 山之村小中学校 田近 岳裕)

大野郡教頭会

心豊かで、たくましく、ひとりだちする子 ～ふるさと白川郷に夢と誇りを～

「ひとりだち」の基盤として人権教育を位置付け、全教育活動を通じた人権教育を推進してきた。

授業改善では、人権教育を通じて培われるべき資質・能力を3つの側面(知識的側面、価値的・態度的側面、技能的側面)で捉え、子ども達の発達の段階や各教科等の特質に応じて、バランスよく育成できるように指導を行った。

学級経営では、「なりたい自分」と結び付けた「よさみつけ」を位置付けることで、自他の人権を守るために主体的に行動する姿と、その姿を具現するための諸活動の意義や目的の共通理解を図ることができるよう指導を行った。

このように教育活動全体で醸成した人権感覚を足場にして、常に人権課題について考える場を位置付けることで、児童生徒は「違いは豊かさ」であるという価値を獲得できるようになってきた。

(文責 白川郷学園 折敷地 浩平)

下呂市教頭会

激増する不登校・不登校傾向児童生徒への支援体制の構築

下呂市の抱える今日的な教育課題のうち、標記について研究実践した。特に、今年度より校内教育支援センターが市内に4つ設置されたため、①教育支援センターを核にした居場所と絆づくりを進める支援体制の在り方、②不登校の未然防止のための発達段階に応じた支援体制の在り方について研究実践を行った。

①は、校内教育支援センターを「家庭以外の第2の居場所」とし、多様な体験を通して他者と関わる体制、②は、こ～小～中で目指す姿と子どもの実態を共有し継続的に支援する「縦の連携」、SSWや市当局等の外部機関と情報を共有し、役割を分担する「横の連携」を進める体制が有効であった。

教頭は、①②ともに、児童生徒の状況の集約と整理、多角的な分析とそれに応じた担当職員等への役割の差配が支援体制の構築に必要であると分かった。(文責 下呂中学校 杉浦 共哉)